セピア4 ふたり

山本哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セピア４　ふたり

【Ｎコード】
Ｎ９７１３Ｅ

【作者名】
山本哲也

【あらすじ】
ストーリー：遅刻したことから体育祭のリレーの選手にさせられてしまった亮太。典子と美雪、そして真吾も同じリレーの選手になってしまい、真吾は走るのが遅い亮太を特訓する事にする。さらにその特訓にさつきも加わることになり…。亮太はさつきの意外な一面を知ることになる。一方、美雪は思い切って典子に亮太への気持ちを尋ねる…。セピアシリーズ第４話。

その日の生徒会の打ち合わせが終わったのは、もう夕方のことだった。
間近に迫った体育祭の準備で、少し長引いていたのだ。
体育祭は文化祭と違い、生徒たちが計画したりする部分はほとんどないのだが、それでも、各委員会との役割分担や調整などといった仕事や、さらに、一部では藤ヶ谷高等学校の体育祭名物とも言われている借り物競走のくじを作成するという仕事があったためだ。
もっとも、最後のものは「仕事」というよりは生徒会役員の「役得」に近い。この作業は生徒会や各委員会の構成メンバーの一人一人が各々一つずつ、好きなことを書いたくじを作成していいことになっており、みんな日頃色々と面倒な用事を行っている鬱憤を晴らすため、奇抜な、あるいは恥ずかしい指示を書いたくじを先ほどまで喜々として作成していた。もう大部分の者が帰ってしまったとはいえ、教室内にはまだその興奮の余韻が残っている。
さつきがふと外を見ると、もう窓の外の町並みはオレンジ色の夕焼けをバックに、藍色のシルエットとなっていた。
（…さて、と…）
さつきは資料をトントン、とまとめると、鞄にしまう。ふと顔を上げると、美雪も同じように資料をまとめていた。その側で、柳井が美雪の帰り支度が終わるのを待っている。
邪魔をしてはいけないような気がして、さつきはそのまま二人の様子を見守っていた。
「さつき先輩、どうかされたんですか？」
椅子に座ったままぼんやりとしているさつきに、柳井が気づく。
「え？　あ、ううん、何でもないの。これが終わったら、いよいよ引退だなって」
咄嗟に、さつきはそう答えて誤魔化した。

「…そうですね。何か、あっと言う間でしたね…」
美雪も感慨深げな顔でそう言う。さつきたち現執行部は、この体育祭が終わると次の執行部の選挙を行い、そして引退ということになっている。
「俺も、ようやくこの重責から解放されるんでホッとしてますよ」
「柳井君、ほとんどさつき先輩に任せてたじゃない」
さも大儀そうにコキコキと首をならす柳井に、美雪が言った。
「これは心外だな。俺はいつだってまじめに働いてるのに」
大げさに肩をすくめながら、柳井がいう。
「ま、そういう事にしといてあげる。さ、帰りましょう。あんまり遅くなると、バスがなくなっちゃうわ」
軽く笑いながら立ち上がってさつきが促す。
「あ、傷つきますね、そういう言い方」
「日頃の行いの結果、でしょ？」
全然傷ついた様子などなくそう言った柳井に、悪戯っぽく笑いながら美雪が追い打ちをかける。
「美雪までそんな事言う？　つれないよなぁ」
そう言いながら柳井はちょっと拗ねたような顔をして見せ、それから肩を大げさにすくめて見せた。

最終少し前の学校から駅への直通バスに乗り込み、三人は駅へと向かう。バスは部活帰りの生徒で込み始めるところだったが、先に乗り込んだ柳井が席を確保してくれていた。後ろの方の二人掛けの席と、その前の一人掛けの席だ。
「どうぞ、お姫様」
柳井は芝居がかった仕草で二人に席に座るように促す。
「もう、柳井君、恥ずかしいなぁ」
恥ずかしそうにうっすらと頬を染めながら美雪がぷっくりと頬を膨らませた。
「わざとだもん。さっきの仕返し」

悪戯っぽく笑いながら、柳井はしれっとして答えた。
「もう…」
「あたしが前に座るから、柳井君と美雪ちゃんが並んで座ればいいじゃない？」
さつきが言うと、
「だってさ」
柳井が興味深そうな顔で美雪の方を見る。美雪は一瞬驚いたような顔になったが、さつきがからかっていると思ったのか、すぐにちょっとむくれたような表情になった。
「あー、さつき先輩まで。いいです、あたし、一人で座ります」
そう言うと、美雪はさっさと一人掛けの席に座ってしまう。
「この通りなんですよ」
さつきの方に向き直ると、柳井は肩をすくめて見せた。
「ま、柳井君、信用ないからねー」
柳井の隣に座り、品定めするように柳井をじろじろと見ながらさつきが悪戯っぽく微笑む。
「あ、さつき先輩まで。私めのどこが信用できないと？」
柳井は気取った仕草で胸に手を当てて言った。
「そーういう所」
さつきが何か言うより先に美雪がぴしゃりと言い放つ。
「どこ？」
すかさず、柳井が辺りをきょろきょろと見回しながら尋ねた。
「もう、柳井君…」
頬をぷくっと膨らませて手を出しかけた美雪が、急に頬を真っ赤に染めて俯いた。さつきが笑いを堪えながらおかしそうに二人の様子を見守っていたのだ。気が付くと、周りに乗っていた生徒達もそれぞれ仏頂面や、興味津々と言った表情で二人の動向を注目している。
「馬鹿っ」
美雪は小さく呟くと、真っ赤な顔で精一杯俯いて周りの視線から

目をそらす。柳井はわざとらしくちょっと肩をすくめてみせ、ちょうど柳井と目のあった女子生徒ににっこりと微笑みかけた。
その女子生徒はどぎまぎした様子で顔を真っ赤にして俯いてしまう。二人に注目していた他の者たちも、それぞれ気まずそうに咳払いなどをして中吊り広告などに視線を移した。

駅に着くと、電車に乗る柳井と美雪、歩きのさつきという二組に分かれた。
「じゃね」
改札の所でさつきが手を振る。
「失礼します、さつき先輩」
「じゃ、先輩、お先に」
二人がそう挨拶を返し、ホームへ降りていくのを見送る。
（…何だかんだと言っても、仲がいいのよねぇ…）
さつきは次第に見えなくなっていく二人の背中をほほえましい気持ちで見つめていた。腕こそ組んだりはしていないが、二人の姿はどこから見ても仲むつまじい恋人同士のように見える。
（…）
一瞬、二人の背中に自分の姿を重ねていた事に気づき、さつきは目を伏せて自嘲気味に薄く笑う。
（…何を今更…）
今まで好きになった相手もいたが、告白したり付き合ったりしたわけでもなくただ淡いあこがれのまま終わらせてしまっていた。それ以降は部活や生徒会の活動の方が忙しく、またそちらに熱中していたためそういった事を考える事もあまりなかったのだ。
（…そっちの方ではあずさに先を越されたわね）
先日、亮太とあずさを引き合わせた時のあずさや亮太のガチガチに緊張した様子を思い出し、さつきはフッと微笑む。それから、くるりと踵を返して歩き出した。

ガラガラ…。
しんと静まり返った教室に、ドアを開ける音がやたらと大きく響き、全員の目が一斉にそちらを向く。遅刻した亮太が教室に入った時には、既にＨＲが始まっていた。何か取り決めを行っていたらしく、教卓の所には学級委員の安藤と坂本女史がいる。
（ちゃー）
心の中でしまったと思いつつ、亮太はこそこそと自分の席へと向かう。
「武内、重役出勤とはいいご身分だな」
教卓を学級委員たちに明け渡し、黒板の脇の所に椅子を置いて座っていた担任の岩口先生が亮太を手招きする。
「いや、あのー、今日はちょーっと目覚ましが…」
そう言い訳をしながら先生の所へ行く亮太の背中にみんなの冷ややかな視線が突き刺さる。亮太は頬がかーっと熱くなっていた。
「ほお、お前の家は目覚ましまで寝坊するのか？」
先生はそう言って取り合おうとはしない。
「いえ、その…」
「ところでな、武内」
しどろもどろで言い訳をしようとする亮太を手で遮り、先生が話し出す。
「今、体育祭の紅白対抗リレーの選手を決めてたんだが…」
「はあ」
「男子の方が全然決まらんのでくじ引きにしようと言っとった所なんだ」
そこまで言うと先生は椅子から立ち上がり、意味ありげに亮太の肩をぽんとたたく。亮太は何となく嫌な予感がした。
「でな、モノは相談なんだが…武内、お前、やってみんか？　やるなら、今日の遅刻はチャラにしといてやるぞ」
みんなには背を向け、まるで密談でもしているかのように、途中からひそひそと声を潜めて先生は言う。

「ええーっ！！」
思わず亮太は大声を出していた。何事かとみんながざわめく。先生が人差し指を立て、『シッ』という仕草をする。
「お、俺、リレーなんて無理ですよ。運動なんてロクにしたことないし」
冗談じゃない、と亮太は思った。普通、そういうのは足の速い者がなると相場が決まっているのだ。亮太はお世辞にも足が速いとは言えない。
「第一、そんなのは陸上部の人にでも…」
「連中が出てくれてるくらいなら、くじ引きなどしとらん。それに、連中は他で既に決まっとるよ」
言いかけた亮太を、ぴしゃりと先生が遮る。
「で、でも俺…」
確かにそれはそうかもしれないが、だからといって自分がやることはないだろう。そうは思うのだが、断りきれずに亮太は俯いてしまう。
「クジで決めるんだ。もしかしたらお前が当たるかも知れんぞ。それなら、今ここで引き受けて、遅刻一回チャラにしといた方がいいと思わんか？」
そんな亮太の肩に手を置き、諭すように先生は言う。
「でも…」
何かを言いかけた亮太を、先生が、分かっている、とでも言いたげな様子で遮る。
「クジで当たるとは限らない、と言いたいんだろ？　だがな」
思わせぶりに間を空けて、先生が続ける。
「その確率は八分の一だ。つまり、八回引けば一回は当たってしまうと言うことだぞ」
「…」
「それに、だ。おまえの所に順番が回ってくるまでに、数人がくじを引く。そうすれば当たる確率はもっとずっと高くなるぞ？　お

まえ、これでも外れを引く自信があるか？」
先生はたたみかけるように言う。そして、亮太はそう言われると何だか絶対に当たってしまうような気がしてくるのだった。
「…わ、わかりました…」
ついに、何か納得のいかないものを感じつつも、亮太は渋々承知してしまう。先生は途端ににやりとした表情になった。
「そうか、よーし」
そう言って亮太の肩を勢い良くぽーんと叩くと、
「リレーの選手、一人は武内がやってくれるそうだぞ」
みんなに向かって宣言するように言う。それを聞いて生徒達が一斉に沸き立つ。それまで居眠りをしていたらしい真吾が、その騒ぎに起こされ寝ぼけ眼で辺りをきょろきょろと見回し、それから周りに調子を合わせて拍手をする。
（…あのヤロー…）
そんな真吾を亮太は恨めしそうに睨みながら席に着いた。ちらりと美雪の方に目をやると、ちょうどこっちの方を見ていたのか、美雪と目が合った。
（！！）
二人ともあわてて目をそらす。亮太は急に恥ずかしくなってきて、耳まで真っ赤になり俯く。確実に減ったとは言え、美雪と同じクラスになってから何回目の遅刻だったのだろう。亮太にはもはや思い出す事も出来なかった。
結局、もう一人はくじ引きで決めることになり、亮太と岩口先生のやりとりの間に、安藤と坂本女史が用意したクジを廊下側の列の男子から一人一人引いていく。皆、そんな面倒なものはやりたくないという心境がありありと分かった。くじを引く表情が真剣なのだ。中には祈るような仕草をしてからくじを引く者さえいる。
（ロシアンルーレットじゃあるまいし、大げさな…）
既に決まってしまっているので蚊帳の外になってしまっている亮太はそんな様子を冷静に眺めている。

（…ま、俺より遅い奴に決まりゃ、言い訳もできるか）
次々とくじを引いては「ほっ」とした表情になる男子たちを見ながら、亮太はそんなことも考えてみる。ただ、そうなったらそうなったで、他より半周は遅れて走ることになり、晒し者のような立場に立たされてしまうのだが、そこまでは考えが回らない。
やがて、くじを引く様子を見ているのに飽きた亮太が、大きなあくびをした時だった。
「んあー！？」
素っ頓狂な大声が教室に響く。
何事かと亮太が声のした方を振り向くと、真吾が自分の引いた当たりのくじを信じられないといった表情で見つめている。
「はい、決まりね。もう一人は片桐君っと」
そう言いながら坂本女史が手にしていたファイルにさらさらと何か書き込んだ。
「ま、待て、これは何かの間違いだ、もう一度引かせてくれ」
「だめに決まってるでしょ」
すがりつくようにして懇願する真吾を、坂本女史が冷たく突き放す。坂本女史はクラスの男子から密かに「鉄の女」と呼ばれている程で、真吾や柳井でさえも苦手にしているらしい。同じ学級委員の安藤などは完全にその尻に敷かれてしまっているのだ。
（けっ、ざまーみろ）
亮太は真吾に向かってぺろっと舌を出した。だが、それを自分に対して舌を出したと勘違いしたのか、坂本女史が眼鏡の奥の鋭い目でキッと睨み付けてくる。亮太は慌てて顔を伏せ、寝たフリをした。
そうしてＨＲが終わり、休み時間になった。
（…やれやれ、面倒な事になったな…）
溜息をつき立ち上がろうとした時、柳井が美雪の許に近づいて行くのが見えた。亮太は気になってつい二人の姿を見つめてしまう。
時折柳井が冗談でも言っているのか、美雪が楽しそうに笑ってい

る。美雪に向かって冗談を言うなんて、あがってしまってまともに喋る事すらままならない亮太にとっては夢のまた夢だ。
（…かなわないよなぁ…）
もう一度、亮太は溜息をついた。
「ナーニしけた顔してんだよ」
いつの間にか、真吾が亮太のすぐ側に立っていて、にやにやしながらそう尋ねてくる。
「別に」
「おまえ、溜息つく前に綾瀬をデートに誘ってみたりはしたのかよ？」
「な！？　で、デートって…」
ぎょっとした亮太の声は裏返ってしまっていた。思いの外大きな声が出てしまい、近くにいた生徒たちが何事かと振り返る。
「別に、遊園地とかじゃなくてもいいんだぜ。はじめは図書館で試験勉強とかな。それだったら、別にデートって感じがしないだろ」
辺りを憚るように真吾が声を潜める。亮太はちらりと美雪の方に目をやり、答えた。
「…む、無理だよ…。あれがいるもの…」
『あれ』とはもちろん、柳井の事だ。
「何言ってるんだよ、何事も、やってみなけりゃ分からないだろ」
本当にそうだろうか？　例えば、空を飛ぶ事は出来ないではないか。それもやってみなければ分からない、とは真吾も言うまい。美雪を誘うという事は、つまり、亮太にとってみればそれと同じ事なのだ。
「…」
無言で首を振り、立ち上がって教室を出ようとした亮太を真吾が止める。
「何だよ」
「これ」
そう言って、真吾は何やらＡ４サイズぐらいの紙包みを渡し、自

分の席へと戻っていく。
「あ…サンキュ」
亮太は急いでそれを鞄にしまうと、ポケットに手を突っ込み、チャラチャラと鳴らして小銭があるのを確かめる。それから、教室を出ようとした。
「どこ行くの？」
途中、典子の席の側を通りかかると、典子が立ち上がって話しかけてくる。
「購買。俺、朝飯食ってねぇの。昼飯だって今のうちに買っとかないと、なくなっちまうからな」
「あ、あたしお弁当作って来たんだ。お昼用にね」
「そなの？　サンキュ。じゃ、それを…」
「だめ。それはお昼用だってば」
典子は『頂戴』というように差し出した亮太の手をぺしっとはたく。
「ちぇっ、じゃ、やっぱり購買じゃねぇか」
「亮太が寝坊するのが悪いんじゃない。大体ねぇ…」
「へいへい、後で聞きますよ」
いつもの小言を言おうとする典子をひらひらと片手を振って追い払うようにして、亮太は教室を出ていく。
「ちょっと、亮太！　…ったくもう、たまには人の言うことちゃんと聞きなさい！！　そんな態度ばっかりしてると、もうお弁当作ってきてあげないんだから！！　夕飯だって作ってあげないわよ！！！」
教室のドアから出たところで、典子が怒鳴る。だか、それからはっと気がついて周りを見回すと、近くにいる生徒たちが皆、何事かといった様子で典子の方を見ていた。
「…亮太の馬鹿っ！」
小さくそう呟きながら、真っ赤になった典子はそそくさと教室に戻って行った。

その日の三時限目の授業は体育だった。体育の授業は二クラス合同、男女別で、校庭と体育館とに分かれて行われるのだが、今日は男子が校庭で、女子が体育館、という日になっていた。
ぽかぽかとした日差しと、時折頬をなでる風が心地よい。
「今日は、百メートル走を…」
体育の村上先生がそう説明している。村上先生は生活指導も行っており、厳しいので有名だった。特に亮太は遅刻が多く、ご厄介になる機会も多いため、既に名前は覚えられてしまっている。
（…ったく、早く終わんないかな…）
亮太達は二列横隊になって座り、先生の話を聞いていた。いや、亮太に限っては聞いているフリをしていた。
購買で買ったカレーパンとジュースで満たしたお腹も、そろそろ空いてくる時間だ。亮太はぼんやりと今日のお弁当は何だろう、などという事を考えている。
「武内ぃ！　聞いとるのか貴様…？　立て！！」
「は、はい！」
先生の低い、すごみのある怒鳴り声が響き、座っていた生徒全員が思わず背筋をピンと伸ばす。亮太はほとんど反射的に立ち上がっていた。
「貴様が見本を見せてみろ」
先生はそう言って顎でスタートラインを示す。
亮太は仕方なくスタート位置についた。ちらりと振り返ると、後ろで真吾が必死に笑いを堪えているのが見える。その真吾を、ポカリと先生が殴っていた。
「位置について」
「用意」
体育委員が号令をかける。亮太は一応、陸上の選手がやるように、地面に両手をつくスタートの姿勢をとった。だが、昔っから体育はまじめにやったことがなかったので右足が前なのか、左足が前なの

か、よく分からない。
「何だそれは！　足が全然違っとる！　それに、ほれ、ケツを上げろケツを！」
先生はそう言いながら足を使ってぐいっと亮太の腰を上げさせる。
「よし、もう一度！」
「用意」
「スタート！」
体育委員が小さな旗を揚げ、スタートの合図をする。だが、亮太はちょっと遅れてしまった。
「何だ今のは！？　もう一度やり直しだ！」
たちまち、先生の怒鳴り声が静かな校庭に響く。結局、亮太はスタートを四度もやり直しさせられてしまい、「遅いから」という理由で二度も走り直しをさせられてしまった。
「…特訓だな、亮太」
やっと授業が終わり、へとへとになって教室へ戻ろうとしている亮太に、真吾が声をかける。
「はぁ？　馬鹿言うなよ」
呆れ顔の亮太が答える。
「はぁ？　じゃないだろ、お前、リレーの選手じゃないかよ」
亮太の真似をしたつもりなのか、『はぁ？』というところを間の抜けた顔で真吾は言う。
「いーよ、そんなの。俺は誰かさんと違って、運動は苦手なの」
興味なさそうにひらひらと手を振りながら、亮太が答えた。まるで取り合わないという態度だ。
「ちゃんと真面目にやったことあるのかよ」
歩み去ろうとする亮太の肩に手を置いてなおも真吾が言う。
「うるさいな。どうせ出来っこないからいいんだよ。かったるいし」
亮太は興味なさそうにそう言うと、その手をふりほどいて教室へ向かった。ただでさえ朝御飯をカレーパン一つで済ませなければな

らなかったというのに、何度も走らされたのでお腹が空いて空いて一刻も早くお弁当が食べたかったからだった。

「ほら、亮太、良く噛んで食べないと…ほらぁ、そんなにぼろぼろこぼして…」

「うふはいな（うるさいな）」

そう言う間にも亮太はすさまじい勢いでご飯をかき込んでいく。

「んが！　…ぐぐっ…」

突然亮太が苦しそうに胸をどんどんと叩く。どうやらロクに噛みもせずにご飯をかき込んでいたために、喉につかえたらしい。

「ほら、亮太」

典子があわてる様子もなくさっと自分の缶入りのお茶を差し出す。二人にとってこれはいつものことだった。

「…ええなぁ…」

その様子を遠くから見ていた安藤がため息混じりにぼそりと呟く。

「何か言った？」

安藤と同じ机を囲んでお弁当を食べながら生徒会からの書類に目を通していた坂本女史が、ちらりと視線を上げて聞き返す。

「い、いや、何でも」

ひきつった笑いを浮かべながら安藤は誤魔化し、お弁当をかき込む。と、あせっていたためか、喉に詰まらせてしまった。

「ん、んぐ…」

一瞬机の上に置いてある坂本女史の紅茶に目をやるが、女史の冷ややかな視線に気圧されてか苦しそうに胸を叩きながら慌てて水飲み場まで走っていく安藤。坂本女史はその後ろ姿を冷ややかな目で見送りながら、

「…馬ー鹿」

ぼそりとそう呟くと、紅茶を一口飲んでまた書類の方に注意を戻した。

「よ、色男」
典子に差し出されたお茶を飲んで一息ついた所へ、真吾がやってきた。手には購買で買ってきたらしいパンを持っている。ふと、典子は真吾の食事がそれだけで足りるのだろうかと思った。
真吾は亮太よりも長身で、体格もがっしりとしている。それが、カレーパンや焼きそばパン、あんパンなどといった物だけで維持できるとはとうてい思えない。
だが真吾はそんな典子の心配にも気がつく風でもなく、近くの空いている席から椅子を無断で拝借するとそれを亮太達の側に置き、どっかりと腰を下ろす。
「…何だよ」
亮太が箸をくわえたままジトっとした目で真吾を見る。
「まあまあ、お前ら二人の甘ーい時間の邪魔は…」
バシッ！
そう言いかけたところへ典子の拳が飛ぶ。真吾はそれをすんでの所で手で受け止めた。
「い、いや、冗談」
ひきつった顔で真吾が言う。
「ところで、亮太」
「何だってば」
「さっきの特訓の話だよ」
パンをかじりながら真吾が言った。
「だから俺はやらないって言ってるだろ」
うんざりした様に亮太が言う。大体そんな事だろうとは思っていたのだが。
「そう嫌な顔をするなよ、これはお前が恥をかかないようにというありがたーい男の友情だぜ。でなきゃどうして俺がそんなめんどくさい事するよ？」
「小さな親切大きなお世話、っていう言葉があるぜ」
『心外だ』という様子で話す真吾に、亮太が言い返す。

「何？　特訓って」
典子が興味津々といった表情で話に加わってきた。
「それがな、さっきの体育の時間、亮太の奴百メートルを…」
そこから先はごしょごしょと典子の耳元で囁く。あからさまに亮太を意識しているのだ。亮太はそんな様子を横目で睨みつつ、表面上は無視してお弁当を食べ続けた。
「えー！？　そんなに遅いの！？　だって亮太、リレーの選手じゃない！」
話を聞き終わった途端、典子が素っ頓狂な声を上げる。
「…お前、何年一緒にいるんだよ、俺が運動苦手なの知ってるだろ」
何を今更、といった様子で亮太が答えた。
「それにしたって…やだなー、あたしまで恥かいちゃうじゃない」
「…何でお前が恥かくんだよ」
亮太は既に自分がビリになって恥をかくというのが前提になっている会話に少なからぬ抵抗感を覚えつつ、典子に尋ねる。
「あ、そか、亮太は遅刻したから知らないんだっけ？　あたしと美雪も、リレーに出ることになってるのよ」
「な、何っ！？　…う、うぐっ…」
驚いた拍子に、亮太は再びご飯を詰まらせてしまう。
「…ほら、亮太」
典子が呆れた様子でお茶を差し出した。
「な、だから、特訓。こいつ一人遅いと、俺たちまでとばっちりを受けるからな。典子も綾瀬を誘って、体育祭の日までに何とかこいつを鍛え上げる。いいだろ？」
真吾がたたみかけるように言う。
（…せっかくだから、亮太に見せ場を作ってやろうっていうのかしら…）
普通なら、めんどくさがり屋の真吾がそんなことに熱心になるはずがない。だとすれば、真吾は亮太が少しでも活躍できれば美雪に

対していい印象を与えることができる、と考えているのだろうか。
「典子？」
考え込んでいる典子に、真吾が促す。
「うーん…あたしはいいけど…美雪は…ま、後で聞いてみるね」
美雪がのってくれるかどうかは自信がないが、典子はそう答えた。
「んじゃ、よろしく」
そう言うと真吾はまたパンを食べ始める。
肝心な亮太を全く無視して話が進んでいた。
「…俺は全然良くないんだけど…」
亮太はぼそりと呟く。あるいは真吾は聞こえないフリをしていたのかもしれないが、その呟きは少なくとも典子の耳には入る事はなかった。典子は少し物思いに沈んでいたのだ。
いつもほとんど話す機会もない亮太と美雪の間に、多少でもきっかけを作るのは悪い事ではないだろう。典子はそう思う。大体、亮太は美雪の事となると意識しすぎる。この調子では、本当に、手を握るまでに百年もかかってしまいそうだ。そうじゃなくてもライバルが多い上に、何と言っても美雪の側には柳井がいる。かたや成績優秀、ルックスよし、話題も豊富、というのに対し、亮太は成績は限りなく赤点に近い超低空飛行、ルックス十人並、好きな女の子の前ではロクに口を利く事もできない、ときている。このままの亮太では百人位束になってかかってもかないそうにない。
（…亮太ったら、あたしがいないと全然だめなんだから…）
典子は、ぶつぶつ言いながらもお弁当を食べている亮太を見た。特訓については不満があるのか、少し不機嫌な顔をしているが、相変わらずおいしそうにがつがつと典子の作ってきたお弁当をかき込んでいる亮太。そんな亮太を見ていると、典子はとても幸せな気持ちになれるのだった。
典子は、亮太の悲しむ姿など見たくはなかった。亮太が美雪の事が好きならば、その想いをかなえてやりたい。
…だが…。

（美雪が柳井君と付き合ってくれていれば、亮太は…）
その一方で、どんなにうち消そうとしてもそう思ってしまう自分がいる事もまた、事実だった。

暫く経つと美雪と柳井が生徒会室から戻ってきた。生徒会の書記をしている美雪は昼休みに定期的に行われているミーティングに出席していたのだ。
「ほら亮太、特訓の話、美雪にしなさいよ」
「え？　お、俺が？」
「そ。亮太のための特訓でしょ」
さも当然、というように典子がきっぱりと言ってのける。
「…俺、別に特訓なんか…」
亮太はぶつぶつと不満げに呟く。美雪と話す口実ができるのは嬉しいが、自分が走るのが遅いから、などという理由を言うのが格好悪いのだ。
「美雪、亮太が話したい事があるって」
そんな亮太にはお構いなしに、典子が美雪を呼び寄せた。
声を掛けられた美雪は、一瞬戸惑った表情を見せたが、すぐに亮太たちの側にやってくる。
「話って何かしら。武内君？」
小首を傾げるようにして美雪が尋ねた。その仕草に長い髪がさらさらと揺れ、シャンプーの甘い香りがふうわりと漂う。亮太は心臓がドキドキして、息が苦しいほどだった。口を金魚のようにぱくぱくさせて、やっと言葉を絞り出す。
「あ、い、いや、その、実は…り、リレーの特訓を、一緒にやってもらえないかな、なんて…」
「特訓？」
美雪が、キョトンとした顔で聞き返した。
まあ、無理もない。体育祭は文化祭などに比べて生徒がそう熱心になるようなイベントでもないのだから。学校によっては球技大会

などでお茶を濁してしまうところも多いし、そもそもにおいて高校の体育祭は小学校の運動会のように休日にやるようなこともなく、父兄が見に来る、などと言うことは最初から想定してはいない。
「…あ、いや、俺さ、は、走るのすごく遅くって…それで…で、でもやっぱ馬鹿みたいだよね、特訓なんて…はは…」
やはり、馬鹿げていると思われたのだろうか。それとも、格好悪いと思われたのだろうか？　亮太はひきつった笑いをしてその場を取り繕おうとする。大体、はじめから亮太はやりたくはなかったのだ。心の中で真吾と典子に恨みの言葉を投げかける。
「…ううん、そんなことない」
だが、そんな亮太の予想に反して美雪の反応は好意的だった。
「へ？」
予期していなかった答に、亮太の脳は一瞬、その活動を停止してしまう。
「偉いな、武内君、そこまで一生懸命にやろうとしていたのね。やりましょう、あたしにも協力させて」
美雪は熱のこもった調子でそう答えた。
「あ、ありがとう。お、俺、頑張るよ」
戸惑いながらも調子を合わせる亮太。
「それで、どうしたらいいのかな」
「え？　あ、えと、それは…」
「元々言い出したのは真吾だから。後で聞いとくね」
しどろもどろになる亮太に典子がそう助け船を出す。真吾は今どこかに行ってしまっていなかったのだ。
「あ、そうなんだ。じゃ、後で、ね」
「う、うん。じゃあ、よ、宜しくお願いします」
引きつった笑いを浮かべながらぎこちなく答える亮太。
（…第一関門突破、ね…）
側では典子が半ば呆れたようにそんな亮太を眺め、それから、フッと少し寂しげな顔をして俯いていた。

（…亮太ってば、あたしがいないと全然ダメなんだから…）
心の中でそう呟いている自分に、典子は気づいていなかった。

夕闇に向けて少しずつその色を深めつつはあるが、空はまだ青い。
ゼハー、ゼハー。
Tシャツ姿に下は体育で使うジャージという格好の亮太は荒い息で空を見上げぺたんと地面に座り込んだ。あの空が夕焼けでオレンジ色に染まるまで、特訓は続くのだ。
亮太達は今、学校の近くの河川敷に来ていた。放課後、亮太達は特訓のために校庭に出てみたのだが、校庭では陸上部やサッカー部が所狭しと練習をしていて、亮太達が練習をする場所などどこにもなく、しょうがないので近くの河川敷に来ていたのだ。ここは陸上部の中でも長距離専門の者や、その他の部活がロード練習用によく使用しており、今もさながら藤ヶ谷高校第二グラウンドと化していた。
「何だよ亮太、もうへばったのかよ」
亮太と同じ、Tシャツにジャージ姿の真吾が半ば呆れた様子で近づいてくる。
「ち、ちょっと待ってくれよ、俺はそんなに…」
「そんなにって、まだ2回しか走ってないだろ。しかも二百メートルを、だぜ？」
上下ジャージ姿の典子と美雪もこっちへ歩いて来る。何を勘違いしたのか、亮太は始めテニスウェア姿で二人が来るのをちょっと期待していた。しかし、当たり前だがその期待は見事に外れてしまっている。その折り表情に何らかの変化が現れてしまったのか、真吾に『何を考えていたんだ？　亮太君？』等とからかわれていた。
典子と美雪の二人も、まだ全然何ともない様子だ。亮太はさすがに自分が情けなくなってくる。
「…やっぱ、俺には出来っこないよ」
他の三人と一緒に走ると、亮太はいつも大きく遅れてしまうのだ。

美雪が気を使ってかペースを落としてくれているのがわかったが、それが余計に惨めさを感じさせる結果となっていた。
「今からそんなこと言っててどうすんだよ。大体、やることやってない奴に限って、『出来っこない』なんて言うんだぜ」
呆れた様子で真吾が答えた。
「何よ亮太、もう終わり？」
こっちにやってきた典子も呆れた声で尋ねる。
「う、うるさいな、俺は誰かさんと違って繊細なんだよ」
「大丈夫？　最初はゆっくりでも、焦らず自分のペース行きましょう？」
美雪が気遣うように亮太の側にかがみ込み、そう励ました。
「う、うん…」
俯いた亮太は曖昧に答えた。美雪の優しさは嬉しかったのだが、それは同時に亮太自身のプライドを傷つけさえもする。だが、もし誰かが今ここで、美雪に優しくされるのがいいか、冷たくされるのがいいかと尋ねたら、躊躇なく「優しくされる方がいい」と答えるだろう。それは、美雪を好きになったという亮太の目の確かさの証明でもあったからだ。
「あれ？」
不意に、聞き覚えのある声が響き、亮太の意識を現実に引き戻す。顔を上げると、バレー部のユニフォーム姿のさつきが部の後輩達らしい女子を連れて土手の上からこちらを見下ろしている。
「あ、さつき先輩」
美雪がそれに気づいて挨拶をした。
「亮太君、美雪ちゃん、それに真吾君まで、どうしたの？　その格好」
さつきは後輩達を一緒にいた他の三年生に任せると、亮太達の所へ降りてくる。どうやらここでさつきと初対面なのは典子だけらしい。亮太や美雪はそれぞれの理由でさつきとは知り合いだったわけだが、真吾は一体どういうルートでさつきと知り合ったのだろう。

亮太は今更ながらに真吾の女性の交友関係の広さに感心し、また呆れもした。
「体育の居残りか何か？」
さつきが怪訝そうな目で四人を見る。
「あ…これ、体育祭のリレーのための特訓なんです」
ちょっと恥ずかしそうに美雪が答えた。
「へえ、特訓…」
さつきが物珍しそうに言う。それを見た真吾がにやりと笑い、話し出す。
「そうなんですよ、この亮太が走るの遅くて…体育の時間に測ったらなんと…」
「言うなっ！」
茶目っ気たっぷりに話す真吾の口を、亮太がふさぐ。
「え？　何、何？　いくつなの？」
さつきが意地悪く身を乗り出す。
「い、いえ、何でもないんですってば」
片手で真吾の口をふさぎつつ、真っ赤な顔の亮太はもう片手をぶんぶんと振って『何でもない』と必死で訴える。
「実は…」
その隙に、典子がごしょごしょと耳打ちするようにさつきに話しかける。
「わっ！　よせっ！　裏切り者っ！！」
あわてて典子を止めようとする亮太を、真吾ががしっと捕まえた。
「いいじゃん、亮太、聞いてもらおうぜ。その方が少しはやる気が出るだろ」
「真吾、お前ーっ！！　男の友情はどうしたんだよっ！！」
「俺はいつだって女性の味方さ」
しれっとして真吾が答えた。
亮太がじたばたとあがいている間に、典子がさつきに話してしまう。耳打ちしているので直接言葉は聞き取れないが、さつきの見

せた『えっ』というような驚いた表情でそれとわかる。
「くそ…」
亮太はへなへなと力無くくずおれた。美雪はそんな様子を見て、必死に笑いを堪えようとしてはいるが、失敗していた。
「…クッ…り、亮太君、そりゃあ頑張らなくちゃね…プッ…」
笑いを堪えて亮太に言いかけたさつきが、途中で笑い出す。
「…そ、そんなに笑わなくたって…」
少し惨めな気持ちになり、亮太は拗ねたような顔をする。
「ゴメンゴメン。でもちょっと嬉しいな、亮太君達が体育祭にそこまで一生懸命になってくれて」
さつきが嬉しそうに言う。
「え？」
きょとんとした顔で亮太は聞き返した。
「だってそうじゃない？　文化祭に比べたら体育祭ってもり上がりに欠けるでしょ」
「そりゃそうですけど…」
「でも、一生懸命に特訓してる。別に私が計画立ててやってるわけじゃないけど、生徒会でもいろいろやるから。それに、これが最後だし、ね」
「最後って？」
ぽかんとして、亮太が聞き返す。だが、さつきが答えるより早く、呆れ顔の典子が答えた。
「ばっかね、これが終わったらすぐ、次の生徒会の選挙じゃない」
「あ、そっか」
それは、亮太にとっては初耳だった。いや、本当は聞いたことはあったのだろうが、生徒会に興味などかけらほども抱いたことなどなかった亮太が、いつ選挙があるかなどということを覚えているはずがない。
「だから、何だか嬉しいの」
さつきはそう言って嬉しそうに微笑む。生徒会長であるさつきは、

他の生徒達と比べてより主催者側の立場に近い感覚なのだろう。ちょうど、文化祭でクラスの出し物を決めて準備するときのような気分なのかも知れない。
「それじゃね。頑張って」
さつきはそう言って、足取りも軽く去っていく。
「さつき先輩も、頑張って下さい」
亮太がそう言うと、さつきは途中で振り返って手を振った。
「じゃ、『頑張ら』なくちゃな、亮太？」
ぽん、と亮太の肩に手を置き、意地悪く真吾が言う。
「ち。わ、わかったよ」
渋々そう答える亮太。
特訓が再会された。

その翌日も同じように河川敷で特訓する事になっていたのだが、その日は美雪と典子が部活のため参加できなかった。二人ともテニス部のレギュラーで、おいそれと休めるような立場にはなかったのだ。
「分かってるんでしょうね、亮太、これは亮太のための特訓なんだからね。あたし達がいないからってさぼったりしないでよ」
美雪と連れだって部活に行く前、典子はこう念を押していった。
「わぁってるよ、うるさいな。さっさと行け」
それに対する亮太の答えは、いつも典子が口うるさく言った時にするそれだった。
しかし、現実では。
「亮太、何寝転がってんだよ。まだ始めたばっかだろ」
呆れたような顔の真吾が土手に寝転がった亮太を軽く蹴飛ばす。
「疲れた」
亮太は短く答えると、真吾のうるさい蹴り攻撃から身をかわすようにごろりと寝返りを打った。これが自分のための特訓らしい事も、もちろん分かってはいるのだが、気にする必要のある相手がいない

と途端に身体が動かなくなってしまうのだ。もっとも、その相手がいればいたで今度は別の理由から身体が動かなくなってしまうのではあるが。

「…あのな、一番特訓を必要としているのはお前だろうが。そのお前がそんな余裕見せててどうするんだよ」

「うるさいなぁ、分かってるよ、もうちょっとだけ」

そう言いながら、また一つ亮太は寝返りを打った。真吾が『勝手にしろ』とでも言うように肩をすくめ、側に座った。見上げると、水色から藍色へと次第に色を深めつつある空が目に入る。西の空はまだ夕焼けといえるほどオレンジ色に染まってはいなかった。

まだまだ先は長そうだ。典子や美雪、そして真吾と言う身近な人々に対する裏切り行為だからだろうか、さぼっているのがいつも以上に後ろめたい。

目をつぶり、亮太は溜息をついた。どこかの部活が走っているのか、遠くで何を言っているのか良く分からないかけ声が聞こえ、近くでは川ののどかな水音が聞こえている。

「あ、やっぱりさぼってる。言いつけちゃおうかな」

不意に、さつきの声がすぐ側で聞こえ、亮太は慌てて半身を起こして振り返る。

すぐ側の所に、制服姿のさつきが悪戯っぽく微笑んで立っていた。少し短めのスカートから覗くほっそりとした白い脚が目にまぶしい。ちょうど位置的に亮太がさつきを見上げるような状態だったので、もうちょっとで中が見えてしまいそうだった。亮太は反射的に目を逸す。心の中では『見たい！』と思っているのだが、さすがにそれは浅ましいというか、後ろめたい気がしたのだ。

「さ、さつき先輩…どうしてここに…」

「うん、さっきね、下駄箱の所で美雪ちゃんと典子ちゃんに会ったんだけど、その時、典子ちゃんが『亮太の奴、今頃さぼって寝転がってるんじゃないか』って言ってたから、ちょっと見に来たの」

さつきはそんな亮太の様子には気が付かなかったのか、にこやか

な顔で亮太に話し続ける。
「すごいわね、彼女、ばっちり当たってる」
「…典子の奴…」
亮太は忌々しそうに呟いた。真吾が慰めるように肩をぽんと叩き、
「…おまえ、しっかり手綱握られてるな…」
と呟く。
「さーて、あたしはこの事を典子ちゃんに報告しなくちゃ…」
そう言うと、さつきはくるりと踵を返し、学校の方へ向かうフリをする。亮太をからかっているのだ。
「さ、さつきせんぱーい…」
亮太が立ち上がってすがるような目でさつきを見ると、さつきはぷっと笑い出した。
「あはは、嘘よ、う・そ。でも亮太君、この調子じゃあ、典子ちゃんにバレるのも時間の問題じゃない？　それに、寝転がってたんじゃ特訓にならないでしょ」
さつきが言うと、真吾が我が意を得たりという様子で話し始める。
「そうなんですよ。ったく、亮太の奴、典子や綾瀬がいなくなったら途端にこれだから。女の子が見ててくれないと何も出来ない、スケベな奴なんです」
「な、何言ってんだよ！！」
これ以上、余計な事を吹き込まれたらたまらない。亮太は慌てて真吾の口を押さえ、黙らせた。
「あら、亮太君ってそういう人だったの？　ちょっと幻滅…」
「そ、そんな事ないですよ！！　こいつの方こそ…」
「いてて、おい亮太…」
亮太は真吾の頭をぐいと引き寄せると、必死で真吾の悪事を並べ立てようとする。さつきのじとっとした軽蔑するような視線が痛かった。だが、さつきはすぐに悪戯っぽい表情になり、笑い出した。
「冗談よ、亮太君。そんなにムキにならないで。でも、あんまりサボってると、典子ちゃんに報告しちゃうから」

「さつき先輩…」
どうやらさつきの方が一枚上手らしい。亮太は完全に手玉に取られてしまっていた。だが、さつきが本当にそう思っているわけではなかったのでほっとしたような、腹立たしいような、複雑な気分だった。
「じゃ、亮太君、頑張ってね。時々監視に来るかもよ？」
そう言うと、さつきはくるりと踵を返して学校の方へ戻ろうとした。
「あ、そうだ、さつき先輩」
そのさつきを、真吾が呼び止める。にやけた顔をしているところを見ると、なにやら良からぬ事を考えているらしい。亮太はイヤな予感がしたが、数秒後、その予感は現実のものとなった。
「どうせだったら時々監視に来るだけじゃなく、一緒に参加して亮太をしごいてやってくれませんか。俺だけじゃ、ごらんの通り制御しきれないので」
「な！？　何言ってるんだよ、さつき先輩にだって色々予定があるハズだぜ？　そんな迷惑…」
「…いいわよ。部活の無い日なら」
亮太が言おうとしていた様々な言葉は、さつきの一言で跡形もなく吹き飛ばされてしまった。こうなると、いつかと同じように亮太に決定権はなくなってしまう。
「じゃ、明後日の放課後から…」
「うん、じゃあその時に…」
真吾とさつきの間でどんどん決まっていく話を、当の亮太は黙って見ているしかなかったのだった。

それから数時間後、マンションの亮太の部屋では、いつものように典子が亮太の夕飯を作っていた。
「ね、聞いたわよ、さつきさんが特訓に加わるんだって？」
鍋の中身をかき回しながら典子が言う。とたんに、ゲームをして

いた亮太の指が滑り、運転していた車がスリップして壁に激突してしまう。
「…タイムアタック中だったのに…」
恨めしげにそう呟くと、亮太はゲーム機の電源を切った。もうさっきから五度も挑戦していたのでこれ以上やる気になれなかったのだ。
「誰から聞いたんだよ」
「真吾から。こっち来る前、電話があったの」
亮太はキッチンの方を振り返り、典子を見つめる。典子は味噌汁をおたまですくって味見をしていて、亮太が見ている事には気がついていないようだった。
いつの間に、真吾は典子と話していたのだろう。真吾は亮太達とは中学生の頃からの付き合いだが、真吾が直接、典子に電話をしたというような事は今まで一度も聞いたことがない。ずっと前からそうだったのだろうか。それとも、最近？　亮太は、亮太の知らない二人を見た気がして、急に、典子が遠くに行ってしまったような感じがした。
「どしたの？　亮太。ご飯はもうちょっとで出来るから、後少し待って」
やっと亮太が自分の方を見つめている事に気が付いた典子が、キョトンとした顔で尋ねてくる。その声が亮太を物思いから現実へと引き戻した。後一つ、亮太としては気がかりな事がある。
「あ、ああ。ところで…」
「何？」
亮太はどう聞こうかと暫し躊躇った。あくまでもさりげなく聞かなくては。
「その…なんて言ってたんだ？　真吾の奴」
「…？　別に…ただ、『さつきさんが特訓に加わることになった』って。どして？」
「いや、ならいいんだ。何でもない」

キョトンとした典子の顔から視線を逸らし、亮太は内心ホッと溜息をついていた。武士の情けという奴か、真吾はさつきが特訓に加わることになった詳しい経緯までは話さなかったらしい。だがその様子が典子に疑念を抱かせた様だった。

「…あー、亮太、もしかしてサボってたんでしょ？」

「ち、違うよ！！」

「じゃどうしてさつきさんが特訓に加わってくれるわけ？」

典子は今まで形を持たず漠然としていたものが急にハッキリと繋がりだしたのか、鋭く切り込んでくる。

「だ、だから、それは…」

「亮太がサボってて、様子見に来たさつきさんに真吾が頼んだんでしょ」

「…」

こうなると、典子の勘はズバズバ当たってくる。というより、典子は亮太の行動パターンをすっかりお見通しなのだろう。亮太は何も言い返せなかった。

「違う？」

典子が『反論できるものならしてみなさい』と言わんばかりの調子で迫ってくる。

「…ちが…わない…」

暫くの間をおいて、俯いた亮太はようやく消え入るような声で呟いた。

「…やっぱり。ったくもう、亮太ってばあたしがいないとホンっとにダメなんだから。明日からみっちりしごいてあげますからね、覚悟しなさい？」

悪戯っぽく微笑みながら典子は続ける。

「さ、ご飯出来たから。テーブルの上、片づけて」

そう言って、典子はキッチンへと戻った。その後ろ姿を見て、何故だかひどく機嫌が良さそうだと亮太は思う。

亮太をみっちりしごけるからだろうか？

それとも、料理が上手く行ったから？
もちろん、亮太にその答えが分かるはずもない。取り敢えず、ご飯抜きにされるとか、ごちゃごちゃ小言を言われなくて良かったと思っただけだった。

翌日、放課後になると、亮太と真吾はいつものように着替えて外に出て、玄関で典子達を待つ。女子は別に更衣室があるのだ。
校庭では、相変わらずサッカー部の連中が所狭しと駆け回ったり、陸上部がトラックを走ったりしている。校庭はそこそこ広いはずだったが、こうしてみるとやはり少し手狭なようだ。亮太は漫画研究会に所属していて全く関わりがないので今までは気にもとめていなかったのだが、運動部の間では時折、校庭や体育館の使用権を巡ってトラブルが発生している、という話も今なら頷けた。
「お、そうだ、亮太、先行ってろ」
「あ、おい…」
亮太が何も言う間もなく、真吾はすたすたと校庭の隅っこの方へ行ってしまう。
「お待たせ。…あれ、真吾は？」
それからいくらも経たないうちに典子達がやってきた。
「あっち」
そう言って亮太は遠くの校庭の隅っこを指さす。そこでは真吾が女の子達と何か話し込んでいるらしいのが見て取れた。
「…真吾の奴…亮太のさぼり癖が伝染したのかしら」
呆れたような声で典子が呟く。
「誰のさぼり癖だよ」
聞きとがめて亮太がそう言うと、典子はじとっとした目で亮太の方を睨んで言った。
「…あーら、もうお忘れですの？　亮太君？何なら、昨日の話をここでもう一度して、思い出させて差し上げてもいいですけど？」
「ぐっ…」

亮太は言葉に詰まってしまった。ここで昨日の話などされてしまっては、美雪にまでサボっていた事が知られてしまう。はじめ亮太が『一緒に特訓してくれないか』と尋ねた時の美雪の態度からして、そんな事を知られれば軽蔑されてしまうかも知れない。

「昨日の話って？」

キョトンとした顔の美雪が典子に尋ねる。

「な、何でもないよ！　綾瀬さん！！　そ、それより、真吾なんか放っておいて早く行こう！」

「え？　ええ…」

「行くぞ、典子！」

「あ、こら、ち、ちょっと待ってよ、亮太ってば！」

これ以上突っ込まれてはたまらない。亮太は典子の手首を掴んですたすたと歩き出す。

事情が良く飲み込めずキョトンとしていた美雪が慌てて後に続いた。

河川敷では既にいくつかの部活がウォームアップのためなどで走っていた。ここは、いつもこのぐらいの時間が一番混んでいる。もう暫く経つと、それぞれ本来の活動の舞台に戻って行き、残るのは陸上部の長距離などわずかな部活のみとなる。

吹き渡る、少し肌寒い風が亮太を冷静にさせた。

「…ちょっと、亮太」

困ったような典子の声が聞こえ、亮太は振り返る。

「手、痛いよ…」

「え…？　あ、ワリィ」

気が付くと、まだ亮太は典子の手首を掴んだままだったのだ。慌てて亮太が手を離すと、典子は赤く手形のついた手首を痛そうにさすった。

「…ゴメン」

「…うん…大丈夫」

何となく決まりが悪くて、二人は俯いて消え入りそうな声で話す。亮太は何故か心臓がドキドキいっているのを感じた。いつの間に典子の手首を掴んでいたのか、ほとんど覚えていなかった。だが、不思議と典子の手首のすぐに折れてしまいそうな細さと、柔らかい感触だけはしっかりと覚えていた。

「どしたの？　二人とも」

少し遅れてやってきた美雪が真っ赤な顔をして俯いている二人を見て、キョトンとした顔で尋ねてくる。

「…な、何でも…」

「…そう…」

消え入りそうな声で答える亮太に、美雪は視線を落として呟くように言った。三人の間に何となく気まずい雰囲気が流れる。

「さ、特訓しなくちゃ！　時間もあんまりないし、どっかでサボってる真吾なんか待ってられないわ！！」

その雰囲気を吹き飛ばすように、典子が白々しいほど明るく言った。

「…だーれがサボってるんだよ」

「！？」

すぐ後ろで呆れたような真吾の声が聞こえ、典子は飛び上がらんばかりにびっくりして振り返る。そこには青いバトンを持った仏頂面の真吾が立っていた。

「ったく、リレーだからバトンの受け渡しの練習もしといた方がいいだろうと思って、わざわざ陸上部の奴から借りてきてやったのに…」

真吾は、眉間に手を当ててオーバーに溜息をつく。

「そうだったんだ…ゴメン…」

「…」

典子の反応に一瞬驚いたような顔をした真吾だったが、すぐにニヤリと笑って、

「なーに神妙になってるんだよ、らしくないぜ。元気がいいのと

料理が上手いのだけが典子の取り柄だろ？」
『だけ』の所を強調するように言い、ぽん、と典子の背中を叩いた。
「な、何よー、『だけ』はないでしょ、『だけ』は」
口をとがらせて典子が抗議をする。
こうして、ようやくいつもの調子を取り戻し、特訓が始められた。

「はい！　武内君っ」
美雪の手からバトンが渡される。亮太はひんやりとしたバトンの感触を手に感じ、走り始める。
「ストーップ！！」
真吾の鋭い声が飛んだ。
「遅い！　遅いぞ亮太！！　もちっと前から助走つけとけって言ってるだろうが！」
「んな事言ったって…」
「武内君、あたしなら大丈夫。気にしないで走り始めちゃって」
亮太が美雪の事を気遣って遅くしているのでは、と思ったのか、ぶつぶつと何か言いかけた亮太に美雪が笑顔で話しかける。
「い、いや、そうじゃないよ。ただ俺が遅いだけだから…。ゴメン」
情けない気分で亮太はそう謝った。
「あ…ご、ごめんなさい…あたしったら…」
「ねぇ真吾、亮太がアンカーやるより真吾がアンカーやって、亮太が二番に走った方がいいんじゃないの？」
その様子を見ていた典子が傍らの真吾に尋ねた。
リレーの順番は、第一走者と第三走者が女子で、第二走者とアンカーが男子と決まっている。真吾の提案で、亮太たちは典子→真吾→美雪→亮太という順に走る事になっていた。
「いや、亮太の性格から言って、後に誰かが走るとなると適当に手を抜くからな。崖っぷちに立たせた方がいいんだ」

「…」
『そんな事ないよ！！』と力一杯言いたい所なのではあるが、胸に覚えがあるのでそうも出来ない。亮太はただ仏頂面で真吾を見ている。
「あともう一つ、亮太は先に走ってる奴がいるとすぐ諦めるタイプでもあるからな。俺達三人が出来るだけリードを広げるようにして、逃げ切らせる方がいいんだ」
何か含む所でもあったのだろうか、真吾は話している最中、ちらりと亮太の方へ一瞥をくれた。
（…？）
だが、ついに亮太にはその意味が分からなかった。あるいは、亮太の気のせいだったのかもしれない。
「じゃ亮太、もう一度やるぞ。綾瀬、悪いけどよろしく頼む」
「ええ。頑張りましょう、武内君。大丈夫、きっと武内君なら出来るから」
美雪は微笑んでそう言い、亮太の手からバトンを受け取って少し離れた所まで小走りに駆けていく。そこから少し走って亮太の所まで来てバトンを渡すのだ。
（…はぁ…）
顔にこそ出さなかったが、亮太は内心溜息をつく。見上げると、空はまだ青かった。

それから暫くして、ちょうど一休みしていた所へさつきがやってきた。今日もバレー部のユニフォーム姿だったが、後輩たちは他の人に任せてあるのか、一人のようだ。
「どう？　特訓は進んでる？」
そう言ってさつきは亮太に意味ありげにウインクして見せた。
「ま、まぁ、何とか…」
亮太は引きつった笑顔で答える。
「あ、さつき先輩、明日はよろしくお願いします。みっちりしご

いてやっていいですから」
　まるで母親が自分の子供の事を担任の先生に話しているかのように、そう言って典子がぺこりとお辞儀をする。その典子の仕草がとても自然なものに見えて、美雪はキュッと胸のどこかが痛む気がした。
「任しといて、典子ちゃん」
　さつきが力こぶを作って見せ、悪戯っぽく微笑む。
「…ハハ…お手柔らかに…」
　引きつった笑顔で亮太はそう言った。さつきはやる気十分のようだ。さつきには悪いが、亮太は今からげんなりとして来てしまう。
「じゃ、あたしまだ部活の途中だから。みんな、怪我しない程度に頑張ってよね」
「先輩も、気をつけて」
　亮太が言うとさつきは片手を軽くあげてそれに答え、学校の方へ向けて走って行く。
　さつきの身体が上下する度に、艶やかなポニーテールが左右に揺れていた。
（…さつき先輩って…スタイルいいんだなぁ…）
　去っていくさつきの後ろ姿を見つめながら、亮太はぼんやりと思う。もっとも、亮太はポニーテールの方ではなく、別の方に目がいっていたのではあるが…。
　亮太がそちらに目を奪われていると、突然背後で甲高い奇声が響いた。
「くぉうらぁ！！　武内、貴っ様ぁ、さつき先輩に対して何といういやらしい目を向けとるんだぁ！！」
　みな何事かと振り返る。
「新庄！？」
「新庄」
「新庄君！？」
　亮太、真吾、典子の三人はほぼ同時に声を上げた。

後ろには、両手を腰にやり、ちょっとガニ股気味に足を開いて仁王立ちをしている男子生徒がいた。短めの黒髪に縁の太い黒縁眼鏡をかけ、肩をいからせたその生徒の名は、新庄康太郎という。康太郎は亮太や真吾にとって止めるのは服装検査の時だけという襟のホックまでご丁寧にもきっちりと止め、袖口からは制服の白いナイロンのYシャツが覗いている。

康太郎は一年の頃、亮太達と同じクラスだった。上に『クソ』がつくほどの真面目な堅物なのだが、ただの『ガリ勉君』とこの康太郎の違うところは、人とテンポが一歩といわず二歩、三歩もずれており、さらによせばいいのにわざわざいろいろなことに首を突っ込むようなタイプだというところだ。おかげで、新学期が始まって一ヶ月もした頃にはクラス中の者から何となく煙たがられていた。もちろん、亮太や真吾も同様である。典子はあまり関わりがない方ではあったが、関わりになりたいとも思わなかった。

「大体、だな、武内！　片桐！　何だその格好は！　きちんとした体操着があるだろうが！！　Tシャツなど着くさって…」

康太郎の説教が始まる。康太郎はこうなると一人悦に入って延々と話し続けるのだ。

「今日はここまでだ。行こうぜ」

その新庄の様子を見て、真吾がそっと亮太達三人に囁く。

「え？　で、でもあの人…」

美雪が戸惑いの表情を浮かべる。

「いいの。どうせ気付きゃしないから」

典子がそう囁き、美雪の手を引っ張る。

そうして、亮太達はこそこそとその場を去った。後に残された康太郎はそれにも気付かず延々と説教し続ける。

「ね、何あれ」

「しっ！　目を合わせちゃだめ！」

下校途中の女子生徒達がひそひそ話しながら足早に通り過ぎていく。

「…新庄君？　何してるの？」
それから暫くして、再びそこを通りかかったさつきが声をかける。さつきは暫く立ち止まって、一人誰もいない空間に向かって説教し続ける康太郎の様子を見ていたのだが、ついに意を決して声をかけたのだ。康太郎が風紀委員のため、さつきは康太郎のことを知っていた。とはいえ、いくらさつきでも委員の一人一人を覚えているはずもなく、康太郎自身のそのキャラクターによるところが大きいのだが。
康太郎はさつきに気がついた様子もなく説教し続けている。
「新庄君？」
まだ気がつかないようだ。そもそもにおいて、ばかでかい自分の声にかき消され、さつきの声など聞こえていないのかも知れない。
「…」
溜め息をついたさつきは康太郎の肩をぽんぽんと叩いた。しかし、反応がないので今度はもう少し力を込めて叩く。
やっと康太郎がうるさそうに振り向いた。
「誰だ！　今いい所なのに…どわっ！！　くくく、栗本先輩っ！？」
康太郎は飛び上がらんばかりに驚き、直立不動の姿勢になって敬礼する。一体どこで覚えたのだろうか。
さつきはそんな康太郎の様子には慣れっこになっていたので、もうあまり気にしないようにしていた。
「何してるの？　演劇か何かの練習？　それとも、怒鳴ってストレスを発散させようってやつ？」
「い、いえ、とんでもありません！　じ、自分はこの不届きな連中に修正を…！？」
そう言いながら亮太達のいた方を振り返った康太郎は、初めてそこに誰もいない事に気付いた。
「い、いない！？」
そんな康太郎の様子を見て、さつきはクスリと笑った。

「さっきからずっとよ、新庄君。お説教も、程々にね」
そう言ってさつきは行ってしまう。
「…な、なんて素敵な笑顔…くううう、お、おおおのれ武内、ワシに栗本先輩の前で恥を…」
地団駄を踏み、一人怒りに燃える康太郎だった。

それから幾日か、そんな特訓が続いていた。
「亮太君！！　もっとしっかり腕振って、足をあげて！！」
さつきの鋭い指示が河川敷に響く。さつきは普段は優しいのだが、いざ練習となると真吾も顔負けなほどの厳しさを見せていた。
「ハァハァ…」
亮太は肩で荒い息をする。さっきから何度も走らされていたのだ。いい加減、足が上がらなくなってきている。
「…じゃ、そろそろ終わりにしましょうか」
そんな亮太の様子に気がついてか、それともそろそろ時間だと思ったのか、さつきはちらりと真吾の方を見るとそう言った。亮太にとっては待ち望んでいた言葉だ。
「そうですね。先輩、お疲れさまです」
真吾が頷いて言う。
「…お…お疲れ…さまでした…」
荒い息でようやくそれだけ言う亮太にさつきが気遣うような表情を見せた。
「…大丈夫？　亮太君…少し厳しくしすぎたかしら…」
「…だ、大丈夫です…」
そう答えた亮太は、空を見上げる。空はすっかり藍色に染まり、太陽はとっくに西の空に沈んでいた。
今日はこれからバイトなのだ。
（…勘弁してぇ…）
亮太は目眩がする気がした。
「じゃ、戻るか」

暫くして亮太の呼吸が落ち着いてきたのを確認すると、真吾が歩き出す。
「ああ」
短くそれに答えて亮太も続いた。が、ふと気が付くと、さつきがいない。
「さつき先輩？」
「あ、うん、今行くから」
亮太が振り返ると、さつきが短く答えてすたすたと歩き出した。
亮太はさつきの背中を怪訝そうな表情で見つめる。
さっき振り返った時、一瞬さつきが熱でも計るように額に手を当てていたような気がしたのだが、気のせいだったのだろうか。
「どうしたの、亮太君？」
亮太の視線を感じたのか、さつきが怪訝そうな表情で振り返る。
「あ、いえ、何でも」
そう誤魔化し、亮太は後に続いた。
「…やっぱりちょっときつかった？　ゴメンね、亮太君」
「いえ、ちっとも」
亮太は大嘘をつく。
「そう？　じゃ今度の時はもっとしごいちゃおうかな」
「あ、そ、それは…」
「う・そ・よ、亮太君」
慌てる亮太に、さつきは悪戯っぽく微笑んでそう言った。相変わらず、さつき相手では亮太には勝ち目がないようだった。もっとも、相手が典子だったらやっぱりかなわないだろうし、美雪でもやはり亮太に勝ち目はなかっただろうが…。

ファミレス、「ジョックス」でのバイトを終えた亮太は店を出た。時計を見ると、夜八時を回っている。店内の騒がしく、人いきれのする空気から解放され、ひんやりとした夜風が心地よい。
通りはこのくらいの時間になるともう人通りもまばらだ。

「ふぁーあ」
亮太は大きな欠伸をして、腕を回した。
普段やり慣れていない運動をしているので身体のあちこちが筋肉痛になってしまっている。それに、今日は特に疲れて眠い。さつきに事情を話して少し軽めにしてもらえばよかったと今更ながら後悔していた。
（さっさと帰って寝るかな…）
もう一度大きな欠伸をすると、亮太は眠い目をこすりながら家路につく。そして、マンションのすぐ前まで来た所で驚いて立ち止まった。
歩道に藤ヶ谷高校の制服姿の女の子がしゃがみ込んでいたのだ。
「大丈夫！？」
亮太はすぐに駆け寄り、しゃがみ込んでその女の子の顔をのぞき込むようにして言う。そして、もう一度驚いた。
「さつき先輩！」
その女の子はさつきだった。さつきは苦しそうに浅く速い呼吸をしている。額には脂汗が浮かび、乱れた前髪がその汗でべっとりと貼り付いていた。
「さつき先輩！！　どうしたんですか！？　き、救急車…」
半ばパニックに陥る亮太。
「…り、亮太…君…？　だ、大丈夫…」
さつきがわずかばかり顔を上げ、苦しげに呟く。
「全然大丈夫じゃないですよ！　と、とにかく…」
亮太がきょろきょろと辺りを見回す。どこか適当な所にさつきを座らせて…と思ったのだ。だが、寒いのかさつきが両肩を抱えるようにして小刻みに体を震わせているのを見て、考えが変わった。
「さつき先輩、少し歩けますか？」
「…」
さつきは目をつぶり具合が悪そうに俯いて黙ったままだ。
「ちょっと失礼します」

暫く待ってみたが反応がないので意を決した亮太はそう言うとさつきの身体を抱き起こす。さつきは一瞬身体を堅くして亮太の上着をぎゅっと握ったがすぐにその手を離した。
ふうわりと石鹸の良い香りが辺りに漂う。
さつきは結構長身の割に軽かった。腕などもほっそりとしていて、亮太はさつきが自分がイメージしていたよりもずっと華奢な身体つきをしていることに気がついた。
さつきを抱えた亮太は階段を上っていく。その足音がやけに大きく響いて、亮太はどきりとした。
（…こんな所誰かに見られたらコトだな…）
ふと、そんな考えが頭をよぎる。今日は亮太がバイトなので典子は部屋に来なかったのだが、典子がいてくれれば良かったのか、いなくて良かったのか…。
（いなくて良かったって、どういうことだ…？）
自分の考えのおかしさに気がつき、亮太は自問自答する。一体、何を考えていたというのだろう。不意に、ある記憶が蘇り亮太の胸がちくりと痛んだ。
（馬鹿だな、何考えてんだよ…）
亮太は自分を叱責しつつ、ちょっと手間取りながら鍵を開け、部屋の中に入った。それから、奥の部屋の自分のベットにさつきを寝かせ、布団を掛ける。
「…あり…がと…」
さつきが微かに呟く。
「大丈夫ですか？」
亮太がそう尋ねるとさつきは弱々しく頷いて見せた。何か役に立つ物はないかとポケットを探ってみるが、いつのかよくわからないガムが出てきただけだった。仕方がないのでそのままさつきの顔を見ていたが、先程のの考えが脳裏をよぎり、何となく落ち着かないのであちこち片付けるフリをして部屋をうろうろしていた。
ふと気がつくと、さつきは眠ってしまっているようだ。大分落ち

着いてきたのか、以前よりも少し顔色が良くなってきている。
「…」
その時、さつきが何事か呟いた。
「え？　何ですか？」
亮太はよく聞こえなかったのでさつきの上に身を乗り出すようにして聞き耳を立てる。すると、さつきはいきなり何事か呟きながら亮太をぎゅっと抱きしめた。
「さ、さつき先輩！？」
あまりの事に亮太の声は裏返ってしまっている。
「…」
夢でも見ているのか、さつきは誰かの名前を呟いているようだ。その表情はとても安らいで楽しそうで、幸せそうだった。亮太はそのまま何も言えなくなってしまい、黙ってそのままにしていた。というより、固まってしまって何も出来なかった。
やがて、さつきが抱きしめていた腕を放し、またすやすやと安らかな寝息を立て始める。
亮太はそそくさとさつきの側を離れ、ローテーブルの上に置いてあった漫画本を手に取ってぱらぱらとページをめくる。読むつもりだったが、内容など全く頭に入ってこなかった。先ほどの情景が何度もリピートされているのだ。
「…ごめんね、亮太君。もう大丈夫」
それから暫くすると、ベットの方からさつきの声が聞こえた。どうやら起きたらしい。振り返ると、さつきがベットの上で上半身を起こし、弱々しく微笑んでこちらを見つめていた。
「一体、どうしたんですか？」
亮太は少しほっとしてそう尋ねた。さっきは本当にどうしたらいいのか分からなくて、救急車、貧血、日射病…などといった知りうる限りの関係ありそうな単語が頭の中をぐるぐる駆け回っていたのだ。
「…うん、ちょっと気分が悪かっただけ。ここ暫く、忙しかった

から…」
そう言いながら、さつきは前髪を掻き上げる。
「…あ、もしかして、予備校とか？」
亮太はさつきが三年生であることを今更のように思い出した。
「ううん、ほら、体育祭が近いでしょ。その準備とか…いろいろと、ね」
さつきは曖昧に誤魔化す。
「え！？　生徒会ってそんなに大変なんですか？」
驚いたように亮太が尋ねると、さつきはフッと微笑んだ。
「そ。知らなかった？　あのみんなが『つまらない』って言う行事はぜーんぶ私たちがこうして努力してる結果なんだから」
「大変なんですね…」
何だかしょんぼりとした様子の亮太を見て、さつきは吹き出してしまう。そんなさつきを亮太はキョトンとした顔で見つめていた。
「嘘よ、亮太君」
さつきはそう言って笑い出す。
「あ、ヒドイっスよ、さつき先輩…。俺、ホントに悪い事したって…」
口を尖らせて亮太が抗議する。
「ごめーん。でも、生徒会の用事で遅くなったっていうのは嘘じゃないわよ」
さつきはいたずらっぽく笑う。それから、ゆっくりと立ち上がった。
「大丈夫ですか？」
亮太が尋ねる。
「うん。ありがと、亮太君」
さつきはそう言って立ち上がった。顔色も大分良くなったようで、亮太は少しほっとする。その時、ふとある疑問が頭をよぎった。
「さつき先輩」
「何？」

「どうして、生徒会長になったんですか？」
突然の質問にさつきは戸惑うような表情を見せる。それから、少し考え込むような仕草をした。
「…選挙で当選したから、かな」
「そ、そりゃそうですけど…」
亮太ははぐらかされたような気分になった。
「ホントはね、何かやってるんだ、っていう手応えが欲しかったのかも」
そんな亮太の様子を見て、さつきが少し付け加えるように言う。
「手応え？」
オウム返しに聞き返す亮太。だが、さつきからの応えはなかった。どこか遠くを見つめているようなその横顔は、何故かとても寂しげに見える。
「何でもないわ。それより、いい部屋ね。結構片づいてるし。あたし、男の子の一人暮らしってもっと散らかってるものだと思ってたわ」
話題を無理に変えるように、さつきが言った。
「やかましいのがいますんで」
「典子ちゃんの事ね？　告げ口しちゃおうかな？」
「…さつき先輩…」
「あは、冗談よ」
情けない顔でさつきを見つめる亮太を見て、さつきが笑った。
「あ、そろそろ行くわ。ありがとね、亮太君」
そう言って、さつきは玄関へ行く。亮太も見送るつもりでついていった。
「無理はしないでくださいよ」
亮太が言うと、さつきは急に何かを思いだしたように振り返る。
「うん。あ、そだ…」
「はい？」
さつきは何かを言いかけて、少し躊躇う。それから、少し言いに

くそうに声のトーンを落として尋ねた。
「…あたし、何か変な事言わなかった？」
先ほどの情景が、さつきの幸せそうな笑顔が、亮太の脳裏に浮かぶ。だが亮太の口をついて出たのは次の一言だった。
「いえ、何も」
途端にさつきはホッとしたような表情になる。ふっと肩から力が抜けたようだった。
「…そう。ならいいの。それから、この事はみんなには秘密ね。あずさが聞いたらやきもち焼くから」
さつきはそう言って悪戯っぽく笑う。
「あ、はい」
『秘密』と言う言葉の響きが、意外に大きく亮太の胸を打った。『このまま、黙っていていいのだろうか？』と言う問いかけと、『言ってどうなる？』と言う問いかけが亮太の心の中でせめぎ合う。だが、ついに亮太の口が開かれることはなかった。
「じゃ。お休みなさい」
「お休みなさい」
にっこりと微笑んでさつきは出ていく。それを見て、ふと、さつきは一体誰の名前を呟いたのだろうと亮太は思った。あの時のさつきの笑顔は今まで見た事がないほど屈託が無く、幸せそうだったからだ。
そう、今見せた笑顔よりずっと。

そしてとうとう、体育祭前日となった。
今日は授業はなく、予行演習と準備だけだったので学校は午前中で終了している。
「何してるの、典ちゃん」
がらんとした教室に一人残ってぺらぺらと熱心に雑誌のページをめくっていた典子を、教室に忘れ物を取りに来た美雪が見つけて声をかけた。

だが典子は美雪に気がついた様子もなく熱心にページをめくっている。
「典ちゃん？」
「きゃっ！」
ぽん、と、美雪が軽く肩を叩くと典子は驚いて飛び上がった。その拍子に、雑誌が滑り落ちる。美雪がそれを拾い上げた。
それは、料理の雑誌だった。
「あ、何だ、み、美雪、脅かさないでよ」
照れくさそうに典子が微笑む。
「ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんだけど…呼んでも典ちゃん気付かないから…」
「え、そ、そうだったの？　ごめん、ちょっと考え事してたから…」
「…考え事って、明日の…？」
美雪は手に持っていた料理の本を典子に渡す。典子はそれを受け取り、机の上に置いた。
「うん…何か『これ』っていうのがなくって…やっぱ、スタンダートなメニューの方がいいのかな…」
典子は机の上に置いた本をぼんやりと眺めて、眉根を寄せて考え込む。典子はきっと亮太のためのお弁当を作ることで頭がいっぱいなのだろう。美雪は胸がきゅっと痛んだ。
典子は亮太のことをどう思っているのだろう。
（ただの幼なじみ？　それとも…）
「あ、そだ、美雪も一緒に作らない？」
物思いに耽っていた美雪に、それまで考え込んでいた様子の典子が急に顔を上げ、声を掛ける。美雪は一瞬戸惑った。
「え？」
「ね、そうしよ、今日はうちに泊まればいいじゃない？　ね？　ついでに、真吾の分も作っちゃおう。真吾、いっつもパンばっかりだから」

典子は美雪の手を取って楽しそうに話しかける。
「で、でも…あたし、お料理あんまり上手じゃないし…」
俯き、ためらいがちに美雪が答える。
「大丈夫だって。あたしが教えてあげる」
その時、美雪の心の中で、何かが『チャンスだ』と囁いた。うまくすれば、典子に亮太のことをどう思っているのか訊けるかもしれない。
だが、それは典子に対する裏切り行為であるように美雪には思えた。そして、典子の無邪気な笑顔が、その思いをよりいっそう強めている。そうかといって、このままずっとどっちつかずにいてもやはり典子に対する裏切り行為であることに変わりはないのではないだろうか？
「美雪？」
典子に呼ばれて顔を上げると、典子がキョトンとした顔で美雪を見つめていた。
「…じ、じゃあ、そうしようかな。でもあたし、ホントにお料理苦手なんだけど」
「大丈夫だって。美雪、要領いいからすぐに出来るようになるわよ、きっと」
典子が少しほっとしたようにそう言って微笑む。だが、その笑顔の裏でまた、典子も後ろめたさを感じていた。美雪と亮太の間に、なるべく接点を作ってやろう、と思っていたのだ。だが、もし、美雪が柳井と付き合っている、あるいは付き合ってはいないまでもそれに準じるような関係にあるとしたら、美雪にとっては迷惑な事ではないだろうか？
そして、心のどこかに美雪が断ってくれる事を、美雪と柳井がそういう関係であってくれる事を望んでいた自分がいた事も、典子には分かっていた。だったらどうして、誘ったりしたのだろう。断ってくれる事を密かに望みながら…。亮太が失恋する事を、密かに願いながら…。もし美雪や亮太がこの事を知ってしまったら、どう思

うだろう。二人とも自分の事を嫌いになるだろうか。典子は、美雪だけでなく亮太まで、一番大切な人までも裏切ってしまったような気がしていた。

夕方、美雪と典子は駅で待ち合わせをし、そのままスーパーに寄って材料を買った。

どれも同じように見える野菜でも見分け方があるようで、典子は入念に吟味した材料をカゴに入れていく。その表情は真剣そのものだった。

「すごい、典ちゃんはきっといいお嫁さんになれるわね」

スーパーを出てから美雪が感心した様子で言う。典子は嬉しいような、悲しいような、ちょっと複雑な表情をした。

「うーん、それって、何かつまんない女って言われてるみたい」

「ううん、そんな事ない、うらやましいわ。それだって、立派な才能じゃない」

そう言ってから、美雪はちょっと恥ずかしそうに付け加える。

「…それに、あたしはお料理苦手なんだもん。今だって、典ちゃんがどうやってお野菜なんかを選んでいるのか全然分からなかったわ。あたしには、全部同じに見えたもの」

「んー、ま、ちょっとした見分け方っていうのがあるのよ。例えば…」

そう言いながら典子はスーパーの袋からトマトを取り出す。

典子の家までの帰り道に、二人はそんな話をして帰った。

「…はあ…」

絆創膏が巻かれた自分の手を見つめて、美雪は溜め息をついた。さっき、典子と二人で試しに夕食のカレーを作ってみたのだが、その時に切ってしまったのだ。

今、典子は風呂に入っている。先に風呂に入った美雪は、一人、部屋で典子を待っているのだ。いつもは三つ編みにしているサイド

の髪も、今は解かれている。ドライヤーで乾かしたものの、長い髪はまだ少ししめっていた。

美雪は、毛足の長い白い絨毯の上に敷いた布団に座っている。典子の部屋は全体的に白系の色でまとめられていた。家具類は少なめで、白い木製の机が窓際に置かれている他は本棚と小さなタンスと、ベットがあるだけだ。入り口のすぐ右手側がクローゼットになっており、衣類などの大部分はそこに入っているのだろう。

本棚には料理関係の本が数多く目につく。

ぐるりと部屋を見渡した美雪はタンスの上のミニコンポの側に置いてある小さな写真立てに気がついた。立ち上がって見てみると、幼い亮太と典子が並んで写っている。亮太の方は何やら泣いているらしかった。ちっちゃな制服を着ているところから見て、幼稚園か何かの頃の写真らしい。よく見ると、二人の小さな手がしっかりと繋がれていた。まるで、それがお互いの信頼の証であるかのように。

亮太と典子の二人はこうして時を重ねてきたのだろう。美雪はきゅっと胸が痛んだ。過去の事は美雪にはどうする事も出来ない。だが、どうせなら、生まれた時から亮太と一緒にいたかった。ずっと前から、知り合いでいたかった。そうでないのなら、好きになんかならなければ良かったのに、とさえ思う。どうして自分は、亮太を好きになってしまったのだろう。

…親友の幼なじみを。

どうして、亮太の幼なじみが自分ではなかったのだろう。

（…ゴメン…典ちゃん…）

フッと溜息をついて、美雪は写真の中の幼い典子に心の中で謝った。いつの間にか典子に当たってしまっていた自分に気がつき、自己嫌悪に陥る。

（…典ちゃん…あたしのこと、嫌いにならないでいてくれる…？）

どう訊けばいいだろう。どうすれば、自分の真意を悟られること

なく典子にその事を訊けるのだろうか。
（…典ちゃん、武内君の事…どう思ってる？　ただの幼なじみ？　それとも…）
写真の中の典子は『しょうがないなぁ』といった顔で亮太の方を見つめたまま、何も応えてはくれなかった。
やがて、トントンという階段を登る足音が聞こえ、バスタオルをかぶったパジャマ姿の典子が入ってきた。手には湯気の立つマグカップを二つ持っている。
「お待たせ…どしたの？」
そう言いながら典子は美雪の見ている写真に気がつき、つられるように一緒にそれを見つめた。
「…それね、幼稚園の入園式の写真。亮太ってば、その頃は泣き虫でね。何かっていうと、すぐ泣いてた。それは、幼稚園の入園式の日だったわ」
ふっと視線を宙に泳がせ、懐かしそうに典子が言う。
「幼稚園とかって、同じ年頃の子がたくさん集まるでしょ？　亮太ってばね、人がたくさんいるのが怖くって泣き出したの。笑っちゃうよね。それに、一回泣き出すと、あたしが側で手を握っててあげないとずーっと泣いたままだったんだから」
典子は楽しそうに微笑みながらそう続けた。典子にはただ、写真の説明をするという以外には特に他意はないのはわかっている。だが、美雪には二人の時間の積み重ねをまざまざと見せつけられているようにも感じられてしまい、そんな自分が益々イヤになるのだった。
「…仲がいいのね…二人とも…」
やっとそれだけ言いながら美雪はそっと写真立てを元の場所に戻す。
「やだ、止めてよ。腐れ縁ってヤツだってば。亮太ったら、あたしがいないと全然ダメなんだから」
典子がいつものようにそう言ってはにかんだように笑う。典子は、

友達などに亮太との事をからかわれると、いつもそう答えるのだ。
美雪はぺたんと布団の上に座った。
「…大丈夫？　手は」
美雪の手に巻いてある絆創膏を見ながら典子が気遣うように言い、話題を変える。
「うん、平気。でも、コンプレックス感じちゃうな」
「何が？」
「人参一つまともに切れないなんて」
美雪はマグカップを受け取り、その中身を見つめる。それはホットミルクだった。
「慣れよ、そんなの。美雪も、ちょっと練習すればすぐ出来るって」
「そう？」
顔を上げ、美雪が典子の方を見る。
「もちろん」
典子はにっこり微笑んだ。美雪は視線を落とし再びホットミルクを見つめる。そこには、思い詰めた表情の美雪が、ぼんやりと映っていた。
美雪はまだ迷っていた。
『このまま、そっとしておけばいいのだ』
何かが心の中でそう囁く。そしてまた、別の何かがそれを否定する。一体、自分は典子と亮太、どっちがより大事なのだろう。恋と友情。そのどちらかを、天秤にかけなければならないとしたら？
（…でも、まだそうと決まった訳じゃないわ…）
ともすればこのまま黙っていようと思ってしまう自分を、そう励ます。
（…訊かなきゃ…）
心臓の鼓動が早くなり、うるさいくらい耳に響いている。
（…訊かなきゃ…）
唇がかさついて、喉が渇いた。一、二度唇を開きかけるが、言葉

を紡ぎ出せないままつぐんでしまう。
このまま、黙っているべきではないだろうか。
もし、典子が亮太の事を好きだと答えたら？　その時、自分はどうするのだろうか。
果たして亮太の事を諦められるのだろうか？
美雪の頭をいろいろな思いが駆けめぐり、どんどん唇を重くしていく。
（ダメ、ちゃんと訊かなきゃ…）
暫く沈黙が二人の間を支配していた。だが、やがて意を決したように、美雪はぽつりと口を開き、消え入りそうな声で尋ねた。
「…ね、典ちゃん」
「ん？」
料理雑誌に目を落としていた典子がキョトンとした顔を上げる。
「…武内君の事、どう思ってる？」
一瞬の沈黙。美雪は、典子が息をのむ音が聞こえたような気がした。実際には次に典子が答えるまでには一拍空いた程度だったのだが、美雪にはその瞬間が永遠にも感じられた。
「や、やだな、どうしたのよ急に」
気まずい雰囲気をうち破るように、典子が努めて明るく答える。
「え、だ、だってほら、よく噂されてるじゃない？　武内君との事。だから、ホントはどうなのかなって」
気がつけば、典子に調子を合わせ、明るい調子で美雪もそう誤魔化してしまっていた。
違うのに。
典子の本当の気持ちが、聞きたいのに。
美雪の心の中で何かが叫ぶが、もう手遅れだった。
「もう。美雪までそんな事言って。亮太はただの幼なじみ。それに、亮太って一人暮らしでしょ」

そう言ってから何かを思い出すように少し間をおくと、典子は懐かしそうな顔で続ける。
「引っ越しの時、亮太のお母さんに言われたんだ、『亮太の事、よろしく』って…」
「…」
「…だから、放っとくわけにもいかないのよ」
そこまで言ってから、典子は心なしか強調して付け加える。
「…ただ、それだけ」
「な、なあんだ、つまんない。もっと面白い話が聞けるかと思ったのに」
美雪がやたらに明るい調子で茶化し、悪戯っぽく微笑んだ。
「まーったく。今からおばさん化しちゃって」
人差し指で典子がつん、と美雪の額をつついた。
「ね、そう言えばさ、美雪こそ柳井君とはどうなのよ」
悪戯っぽい微笑みを浮かべて、典子が反撃する。
「やだな、柳井君はただの友達。第一あの人、いろいろな女の子と噂されてるじゃない。ほら、E組の…」
「え？　誰、誰？」
二人はひとしきりそういった話に興じた後、早めに床につく。
だが、天井を見つめたまま、典子は眠れずにいた。月明かりが部屋の中に差し込み、ぼんやりと、青白い光が部屋を満たしている。
頭の中では、先ほどの状況が何度も何度も繰り返されていた。
『やだな、柳井君はただの友達』
話の流れで自然と柳井と美雪の仲を聞く事が出来たが、その答えは典子が半ば期待していたものではなかった。
もちろん、亮太のためにはこの方が良かったに決まっている。だが、どんなにそう思おうとしても、心の底からそう思う事は出来なかった。
（…良かったね、亮太…）
典子はタンスの方へ顔を向ける。薄ぼんやりとした明るさの中、

写真の中の幼い二人の姿が、微かに見えていた。
（…美雪はフリーだって。後は亮太の…）
胸が、引き裂かれるように痛み、視界がじわっと滲んでいく。
（…が…頑張り次第…）
後は、もう続ける事が出来なかった。典子は、美雪に気づかれないように枕に顔を埋め、泣いていた。
幼い亮太を泣き止ます事が出来た典子。だが、今、その典子の涙を、誰が止める事が出来るのだろうか…。

同じ頃、亮太もまた、自分の部屋のベットで眠れぬ夜を過ごしていた。いつもより随分早めに床についたので寝られないまま横になっていたのだ。
何度目かの寝返りを打った時、不意に石鹸の香りがした。
（…？）
不審に思った亮太は辺りの臭いをかいでみる。どうやら、前にさつきを寝かせた時の残り香らしい。
（うーん、さつき先輩の臭い…）
亮太は思いきり深呼吸してみた。
（…って、何やってんだか、俺…）
前に国語の授業でそういう変態チックな小説の話を聞いたことがあったような気がするのだが、その時、嫌悪感を覚えたものだ。その真似を自分がしようとは思っても見なかった。少し自己嫌悪に陥って、亮太は天井を見つめる。
（…そう言えば、あの時は気がつかなかったけど、もしかしてさつき先輩、俺の特訓に加わってたんで遅くなったんじゃ…）
そう考えれば、あの時さつきがはっきりと遅くなった理由を言わなかった事も納得がいく。
（だとしたら、さつき先輩をあんな事にしてしまったのは…俺？）
亮太はさつきに対して済まない事をしていたように思った。さつきの特訓が厳しいのでかなり閉口してさえいたのだ。だがよく考え

てみれば、さつきも、そして美雪や典子も、部活などで忙しいなか特訓に参加してくれていたのだ。それに、普段は全くやる気などない真吾が最初に、率先して特訓を始めてくれたのだ。

亮太のために。

その事に思い当たった時、亮太は今までめんどくさいと思っていた事を恥ずかしいと思った。

「…やってみなくちゃ分からない、か」

真吾が前に言った台詞を、亮太は呟く。そして、明日はやれるだけ、精一杯頑張ってみようと思った。

せめて、みんなに対して恥ずかしくない位には…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9713e/

セピア4 ふたり

2010年12月17日00時18分発行